

## 年長組の一学期を

### 終えて思ったこと

高橋 陽子



当園にて初めて年長組の担任になり、しかももちあがりながら年中組の七月から翌三月まで産休・育休をとっていた私にとって、この一学期はつかみどころのない“大変な”毎日であった。

昨年を思い出してみると、年中からの人とは入園のあわただしい時期を三か月すごしただけ。年少からの人にとってもそれまでのようには目をかけ手をかけはできずにいたので、放り出されたような三か

月だったと思う。そして担任が代わり新しい先生のもとで丸九か月をすごして年長になり、名前だけは覚えていた程度の私が戻ってきたわけで、子どもたちの方が“大変な”思いをしていたかもしれない。

進級式から二、三日は緊張していた子どもたちも、幼稚園自体は変わっていないことに安心したのか、私を試しているかのように奔放に遊び始めた。

色々なことにおわれてあたふたしてるうちに、い

くつかのグループができていて、あまり交わることなく一日を過ごしていることに気がついた。特に、四歳からの女兒七名中五人からなるグループは、完全に孤立しているようだった。登園すると五人がくっついて、たいてい外に出て行く。「行ってきます」のことばもなく、帰るまで戻ることもしなかった。よく遊んでいるのだろう、と氣にとめることなくほかの様々な要求に答えたり、ちょっと目立つ動きのある子どもやグループに話しかけたりして一日を過ごしていた。九か月の空白は私に、早く信頼関係を作りたい、子どもに添わなければいけない、という焦り・不安を抱かせ、結果的におっかなびくくりの対応になり、ぎくしゃくした関係を深まらせるだけだった。

その五人の女兒たちに「グ」と感じたきっかけは、進級式より二週間近くたってからのこと。年長さんから年中・年少さんへ、ペンダントのプレゼントをしようということになっていたが、ひもにつけ

る絵をかくのは自分たちの遊びに夢中の子どもたちには後回し、となる。「明日はかこうね」といっても、次の日になれば「えー」「やだー」となる。そんなわけで、一週間すぎ二週間となくなってしまった。

その日の朝、登園してきたA子に「A子ちゃん、ペンダントの絵を今日はいいてね」というと、部屋にまだいた母に隠れ泣き出したのだ。空白のあった担任は、泣かせてしまった、という罪悪感から、なだめるように色々声をかけたが泣きじゃくるばかり。

「玄関のイスのところまで落ち着くまでいてください」と、三人で玄関の方へ行くと……。他の四人が、びったりついて来る。私が一番そばにいてあげるのよ」とお互い牽制しながら、群れて来る。イスのところには机があるのだが、紙やサインペンを運んで、そこで遊んでいる。A子は、年中の二学期に、かなり長い期間母と離れられずに部屋、もしくは玄関で過ごしていたことは聞いていたが、年長になってからは母と一応別れられていたし、友だちと

交じって遊んでいたのです、幼稚園が生活の場として、A子の一部になっているのだらうと思っていた私は、泣かせてしまったこと、元に戻ってしまったのではないかという不安、そして四人の子どもたちには「先生、いらぬわよ」と言われているようで、かなり落ち込んでしまった。そういう事実があつて何日間かは余計にはれものにさわるように関わってしまったのであるが、その五人を見ていると、A子が四人がとりまいている、そういう一団なんだと気がついた。お互いに惹かれあい、一緒にいると落ち着けるといふのではなく、ひたすらA子と一緒にいたいと四人が別々に思つてかたまつていたのだつた。そのことに気づいてから少しずつ気にして見ているとA子は朝、母と一緒にいるが、四人のうち誰からでも声をかけられると、母と別れて遊び出せるようだった。

E子はA子とはいたいが、他の遊びにひかれることもあつて、朝のうちから「帰り一緒に座つてね」

と言っているらしい。A子は誰にでも「いいよ」と言っているようで帰りぎわにトラブルがおこる。その日も、結局座らせてもらえず、泣きじゃくっている。泣きながら今まで心の中にたまつていたことを、一気に話し出す。内容は、いつも朝約束するのに帰りは座れない。B子ちゃんにダメって言われるから、というものだった。B子の強さはすでに感じていたが、日が経つにつれますますエスカレートしていく。外ままごとを部屋から離れたジャングルジムの方にもつて行き、自分はおかあさん、A子は赤ちゃん、他の子は仲間に入れない、もしくは隣のおばさん、もしくは猫などの動物と、勝手に決める。だからままごととは使っちゃいけない、となる。ブランコに乗るにしても、A子ちゃんは、怖いと泣く、他の子は強くこいじゃうから、自分となら乗れる、と決めて他の子とは二人乗りをさせない。

C子は、B子に何を言われても、A子といたいために、我慢し続けたらしい。外ままごとの所に一緒

にいるのに、何もしていないようなので声をかけると、C子が答える前にB子が「だってねえ」と口をとがらせて理由を言っている。C子の言いたいだろうことを代弁して、一緒に遊べるようにしたり、どこかで一緒にやれても、上べだけだろうな」と思う時にはC子の手をひいて雑談しながら他のところへ行ってみたりした。そんなことを繰り返しているうちに、C子が嫌なときは自分から担任に言いに来してくれるようになった。それまでに二か月経っていた。

さてもう一人D子は、A子といたい願望はB子以上に強いが、B子に何か言うわけでもなく言われても自分は自分の思いで一緒にいることが多いように思えた。加えて園で飼育しているチャボを抱きたがり、こちらが何もいわなければ一日中抱き続けるほど没頭していた。チャボを抱いたD子と、A子、B子、C子の四人でいることを

よく目にするが、A子、C子、D子は何となく過ごしているようにも見え気になっていた。

ある日C子が「先生、お遊戯室に来て」と言ってくる。行ってみると大型積み木で囲いができて、A子、B子、D子がいる。C子が「B子ちゃんが一番汚い人魚しかダメって言われた」と言ってくる。B子は聞く前に「だって一番汚い人魚しか余ってないもん」と言う。担任はB子に「一番汚いっていわれたら、イヤな気持ちになるでしょう」と伝え、C子には人魚の出ってくる話―人魚姫―の本を見



に行こう、と言ってその場を離れるようにした。人魚姫の本をとってあらずじを話したり、挿絵を見ながらこの人魚がかわいいねなどと話してからお遊戯室にもって行く。B子もその本に興味をもったらしく眺めるが、C子がかわいいと思ったのと同じ絵をさして「私これね」と言う。C子も「私これがいい」と言うと、「ダメ、私だけ」とB子のことばが強くなりだったので「そんなこと言っていないで人魚になっちゃいましょう」とB子、C子と片方ずつ手をつなぎ部屋に戻る。A子、D子もおいかけて来て、さらに部屋にいたE子も「何事だ？」と興味を示し、人魚のしっぽ作りの用意をし始めた担任のそばに来るが、B子はお遊戯室に戻ってしまう。しばらくしてB子が戻って来て他の子どもたちが大きなしっぽをぬり始めるのを見て、自分もすると言う。C子が「先生、水色ダメって、同じ色ダメって言われた」と言いに来た。(まだそんなことなのか)と思いつつ「いろんな色にしてもきれいいよ」と言っ



た。C子は水色とピンクにぬりわけ、B子に「へんなの」と言われもしていたが、しっぽをつけたりしているうちに気は紛れたようだった。その日は降園時間になってしまい、全員つけられる状態にして引き出しにしまったが、次の日はじゃがいもほりという行事がはいり、その日は私が休んだこともあり、それで降引き出しから出てくることはなかった。こちらから人魚に引き込んでいれば、例えば人魚姫の劇につなげるなどをすれば、子どもに違う世界を提示できて、友だち関係や遊び方がかわったかもしれないと今は思うが、その時は他にも関わりたいところがあったし四人の関係をもっと見たいと思っ

たことがあって、特に働きかけはしなかった。

年長になると園全体の行事に加え、ペンダント作り、よもぎつみ、よもぎ団子やさん、などなど、次々に行事がはいってくる。もちろんその季節にあったものであり是非経験させてみたいものであり、行事に参加する姿を通してその子どもが見えてきたり、子ども同士で新しい発見があったりするのも事実であるが、一日ゆったりと幼稚園の中で遊んでいる姿から得られるものも大きく、大切にしていきたいのである。何日もゆったりと過ごす中から、教師と子どもたちが、子ども同士が、子どもと物とが、出会ったり、お互いを探ったり、離れたりくっついたりしてわかりあっていけるのだと思う。はじめに書いたように年長が初めての私は、行事など特別なことがあるたびに緊張してしまい、何とかこなしているだけでゆとりがもてなかった。終わるとホッとし、また次に何がくる？とかまえての連続だった。

もしも、もっとゆったりした毎日を送っていたならこの五人はどうなっていただろうか。教師のゆとりが子どもたちに伝わり、もっと穏やかに生活する中で、彼女たちが人を頼りすぎることなく、自己防衛のために強くでるわけでもなく、思う存分自分らしく過ごすことが早い時期からできたのではないかな、と思う。

一学期末の様子は、というと、A子とB子は一日中一緒にいるが、C子は他の女のグループにいることが多くなり、D子は違う友だちとロングスカートやおつかわりをしてぶぎけあっていたり、E子はちょっとずつ色々な遊びに加わったり、物を作ったり「つまらない」と担任に言っ来てたりしている。

長い夏休みにはいるのが、惜しいような、そんな学期末だった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)